

民族學の概念

岡田 太郎

民族學の本質は何であるか？ その目的は何であるか？ その研究範囲は何處にあるか？ こうした民族學の概念規定については、現在でさえもなほ民族學者自身の間に於てすら、著るしい相違が見受けられる。民族學の概念が如何に混亂してゐるかは、この科學を意味す可き、術語が一定してゐない事實によつても充分伺ひ得る。シュミットは民族學の概念を明白に表示し得ない主要原因として、一定せる術語の存しない事實を擧げてゐる。(一)勿論これとても概念規定を妨げはするであらう。然し一科學の名稱が一定しない故に概念が混亂するのではなく、概念が不同である故に、從つて當該科學の名稱が一定しないものでなくてはならない。かくの如き概念の混亂は何故に生じたか？ この問題に答へ得るものは民族學の發達史である。從つて此處には詳説を避けるけれども、一言にすれば、民族學が未だ新生科學たるの域を脱せず、爲めに、派生す可き分科を充分に分離せしめ得てゐない點にあると言ふことができる。

民族學の概念の混亂が、その名稱に直接に反映してゐることは上述の如くであるが、それらの名

稱を挙げれば次の如きものがあり、しかもそれらは頗る同義語であるかの如き用法を受けてゐる。即ち、Anthropology, Ethnology, Ethnography, Völkerkunde, Rassenkunde, 等がある。これらの用語のわが國に於ける譯語が、また何等の統一なきものであることは言ふを俟たない。然し譯語の問題は、原語の眞義を明白にすることによつて自ら決定さるべき性質のものである故に、此處に種々な譯語を列挙すべき必要はない。

Anthropology なる語は極めて多様な意味に於て用ひられてゐる。或る學者は、人類の純體質方面の研究、即ち一般に體質人類學 (Physical Anthropology) と呼ばれるものを意味してゐる。更に他の學者は一層廣範圍に亘る意義を附して、Ethnology として理解されてゐる部分をも含む、人類一般の研究であると考へてゐる。この用語は特に英米の學者によつて今日に至るまで使用され來つてゐる。然し人類一般の研究は、その性質と從つてまたその方法とを異にするあらゆる可能性を有してゐる。この故に人類學を體質人類學、文化人類學に二分し、或は社會人類學を加へて三分しなくてはならない必要が生じて來る。然し歐洲大陸、特に獨佛に於ては、之れに何等の接頭語を附加しない限り狹義の意味に使用される傾向が強くなつてゐる。從つて單に Anthropology と稱する場合それは體質人類學を意味するものであり、譯語についても上述の理由により、人類學なる術語によつて體質方面の研究を意味せしめることができる。然しかかる明白さが、術語の上に現はれてきた

のは極めて最近のことである故に、從來の學者が屢々人類學なる語を廣義に解し、民族學の領域をも含むものとして扱つてゐたことを忘れてはならぬ。一八五八年に第一巻を出したテオドル・ヴァン (Theodor Waiiz) の “Die Anthropologie der Naturvölker” であるが、Home University Library の一冊として出たマレット (R. R. Marett) の “Anthropology” は、こうした廣義の用法をなした好適例であり、その他にもこの種の用語例は決して珍らしくない。

Ethnology の語が一の獨立科學を意味するものとして使用されるに至つたのは比較的最近のことであるが、それが最初に公然と用ひられたのは一八三九年に巴里に設けられた Société d'Ethnologie であり、これに較べれば Ethnography の使用の方が古く、既に十八世紀末、丁抹の學者ニープール (Niebuhr) の著述 Beschreibung der Völker 中に現はれてゐると言はれてゐる。⁽¹⁾ これらの兩術語は當初よりして全然違つた意味に於て用ひられてゐた。Ethnology に民族學の譯語を與へるならば、Ethnography に對して民族誌の譯語を與へられる理由は、此點に在るのであつて、民族誌は人類諸種族間の關係を扱ふ分類の科學であつたものが、十九世紀中葉頃よりは種々な人種を描寫する科學であるとされるに至つた。これに反して民族學は一層包括的理論的科學であるとされた。民族誌が屢々特殊民族學また敘述民族學と稱されるのは全く兩者の歴史的發達關係に基づくものであり、従つて民族誌は民族學の特殊的一部分を構成するものであると言ふことができる。ラッツェル (R.

Katzel) は民族學が調査説明を爲すに對して民族誌は敘述の科學であると言ひ、ハインリッヒ・シュルツ (Heinrich Schurtz) 及びキーン (A. H. Keane) は民族學と民族誌とに比較と敘述の差異を認め、特にキーンは集團を個々獨立に敘述するものが民族誌であると言つてゐる。ドイツは民族學と民族誌を同義語として使用してゐるけれども、その大著 Die Anthropologie der Naturvölker を繼承完成したゲルラント Geerland は明らかに兩者の區別を認め、民族學が諸民族の本質を扱ふ科學であるに對して、民族誌は人類現在の分布狀態、その分布方法、その概數等を扱ふ科學であると言つてゐる。此等の諸説は細部に於て夫々相異があるかの如く考へられるけれども、歸着するところは民族誌をもつて民族學の特殊部分と考へ資料視するのであつて、いづれも大差なく、民族學が理論科學なるに對して民族誌は敘述科學たる立場を與へられてゐる。民族學と民族誌との用語法は大體に於て一致してゐるが、唯一の例外として民族誌を廣義に用てゐる場合のあることを注意して置く必要がある。それは一八五九年に設立された Société d'Ethnographie de Paris の場合に見られる例である。然しフランスに於ても近年は民族學の名稱が廣義に用ひられてゐるのであるから、必ずしもこれはフランス學派の特徴とは爲し得ない。文化人類學また社會人類學或ひは單に人類學の名稱のもとに扱はれてゐた分野こそ民族學の領域に屬す可きものであることは後に述べるところであるが、人類學と民族學との混亂また近來兩者の區分が確立されやうとしてゐる傾向等の點に關聯して

想起されるものは寧ろルキス・モルガン(Lewis Morgan)である。人類學の名稱が既にヴィツ等によつて廣義に用ひられ來つてゐた際、モルガンは早く民族學の名稱を自己の科學に對して與へてゐた。^(四)アメリカ學派また英國正統派が前述の如く頑強に人類學なる名稱を固執してゐる理由の一部は、この點にもあるのではないであらうか?「恰かも『資本論』がドイツに於けるヤルダ的經濟學者によつて長い間熱心に剽竊され且つ頑強に默殺されたやうに、モルガンの『古代社會』もまたイギリスにおける先史學の代辯者によつて同様に取扱はれた」と言ひ、更にまた「イギリスの排外主義かぶれの先史學派が、モルガンの結果を横取りするには決して躊躇しない癖に、モルガンの發見によつて行はれた原始歴史觀の革命を默殺するには尙ほ絶えず全力を盡してゐる」^(六)とエンゲルスも言つてゐる如く、モルガンによつて使用された民族學の名稱に意識的に人類學の名稱を對立せしめてゐるといふ疑ひは、モルガンに對する英米の學者の態度より考へれば、必ずしも有り得ないことではないらしく思はれる。とにかく、民族學に著るしい發達を遂げしめたモルガンが、人類學と云ふが如き漠然たる名稱を避け、明確に民族學なる名稱を取上げてゐた事實は充分注意されて好い。

最後に Völkerkunde と Rassenkunde が残されてゐる。前者は字義通り民族學であつて、Ethnology と同義語に使用されてゐるものである。ラッツェルの大著 Völkerkunde の如きその好適例である。またベッセル (A. Peschel) の同名の著書をも數へることが出来る。然るに Rassenkunde

は寧ろ人類學の一部を爲すものであり、人類遺傳共同體即ち各人種の本質形態の時間的空間的存在を認識組織する學である。^(七)故に人種學の名稱のもとに、民族學と區別されなくてはならないものである。然し事實上に於ては人類學と人種學との間には明確な境界線を劃し得ないのが普通であるが人類學をして人類の自然的親縁關係を、そしてそのみを取扱ふものであると規定するならば、人類學と人種學とを區別し得なくはない。キーンの著、Ethnology は民族學と云ふよりも寧ろこの人種學に近い内容を有してゐるのであるが、これは人類學の名稱を廣義に使用する傾向が生ぜしめた必然的結果ではあらうが、決して妥當な名稱とは言へない。この他にも人種學 (Rassenkunde) と民族學 (Völkerkunde) とが同義語であるかの感を抱かしめる用語例がなくはない。然し人種の體質と文化とにその取扱ふ對象を區分するならば兩者の相違は明確に認めることができる。

以上に於て人類學、民族學、民族誌、人種學等の名稱の術語としての混亂を整理し、夫々密接な姉妹關係を有するものではあるけれども、研究の方法と對象を異にするものであり、われわれの場合に於ては、他の術語が捨てられて民族學の名稱が取上げられ、民族誌は特殊また敘述民族學として理解さるべきことを説明した。然らば民族學の研究對象は如何なるものであるか? われわれにはこの新たな問題に進まなくてはならない。

然し本來密接な姉妹關係にある個々の科學分野に、明確な限界を設けることは不可能である。從

つて民族學の概念を幾分詳細に規定しようとするには、純粹に理論的な思惟によることは困難であり、多少とも便宜的な取扱ひをなさざるを得ない。特にこのことは、民族學が人類のあらゆる種族をその対象とするか、或は歴史民族以外のものだけに限定するかといふ、民族學の根本的問題に關して痛感され、歴史學との間に複雑困難と思へる問題を生ぜしめる。ラツツェルが民族學をもつて未開及び半開民族の研究であるとした理由の重なるものは、また歴史學との關連にあつた。然しその理由とするところも、從來の學問的關心が主として文明民族にあつたのであるから、民族學は新たに發見された文明民族以外のものを取扱はなくてはならないと云ふ程度にしかすぎない。これに較べれば、同一な意圖であるとはうふものの、バスチアン(A. Bastian)が、文字を有しない民族をもつて民族學の対象としたことは、多少とも正確に民族學の概念を規定し得てゐる。この點、文字の發明をもつて人類文明の發展に一時期を劃したモルガンの見解と全く同一である。エヂプト、アッシリア、バビロニア、ギリシャ、ローマ、ゲルマンの諸民族を歴史民族としながらも、彼等の間に未開民族のそれに類似した「古代的遺風」を認め得る場合は、これを民族學の研究分野に採り入れ得るとした點に於ても、モンガンとバスチアンの見解には著るしい親近を認めることができる。こうして民族學の直接的対象を非歴史民族に求める學者は、この他にもシュタインメツツ(Steinmetz, S. R.)を始め多數を擧げることができる。然し以上の諸家が用ひてゐる「非歴史民族」なる

言葉は、勿論一の比喩以外の何ものでもない。絶對の「非歴史民族」と云ふが如き民族が現實に存在し得ないことは、既にベルンハイムが論じ盡くしてゐる。^(九)従つて此處に言はれる「非歴史民族」なるものが、從來一般世界史の表面に現はれなかつた沈潜的民族を意味するものではなく、從來の歴史學の決定的資料となつた文書記録——即ち文字——を有しない民族を意味するものであることは明白である。マックス・シュミットは「非歴史民族」なる言葉を避けて、「亞細亞及び歐羅巴文明の圈外に在る人類」と稱してゐる。^(九)然し歐羅巴文明と言ひ亞細亞文明と言ひ、いづれも常識的概念たるを免れ得ない。のみならず、それらが人類文明の發展に於ける段階的規準たり得ないことは、また改めて論じるまでもなく明白である。假りにこうした點を認めるとして、マンチエスター學派の唱へる文化傳播説にして正しいならば、前王朝時代に既に少なからず亞細亞的影響を蒙つてゐたエヂプト文明の、傳播的影響によつてこの文化を建設したこととなる太平洋の住民は、民族學の範圍外に追放されなくてはならず、屢々支那本土に侵入したシベリア原住民の大半も、その亞細亞的影響を免れ得なかつたといふ理由によつて、同じく民族學の圈外に置かれなくてはならない。かくてシュミットの科學的正確性への期待は明らかに失敗してゐる。此處に至つてわれわれは、文存といふ人類進化の劃期的一發明を捉へ來つて、人類の歴史的發展段階の一規準たらしめたモルガンを再び想起せざるを得ない。文字の發明を以て文明時代の開始を見たモルガンによれば、

文明時代に先行する諸時代として蒙昧時代と野蠻時代とが擧げられてゐる。^(一〇) 若しこれら兩時代を總括して未開時代と稱することが許されるならば、この時代に相當する過程にある民族を「未開民族」と稱し得る。この民族こそまことに「非歴史民族」であり、「亞細亞及び歐羅巴文明の圏外にある人類」に他ならない。

然らばわれわれの民族學は、未開民族をそしてそのみを對象すべきであらうか？ この疑問に對しては、われわれは一の反問を試みるだけで充分である。文明民族は文字の發明によつてその文明時代を開始したものであり、先天的に文字を有してゐた特定の文明民族なるものが存在しない以上、その先行時代を除去しなくてはならない理由は何であるか？ 文明民族の生活狀態に關する深い理解がなくては、未開民族の生活狀態を究明し得ないと考へることも、なほ議論の餘地の存するところではあらうが、未開民族のみに限ることも、またそれ自身多くの破綻を示してゐる。文明民族の未開時代はこれを歴史學の範圍たらしめることが至當であると考へた謙讓な學者は、實にこの謙讓の故にこそ、あらゆる科學に慇懃を通じてその貞操を失なはなくてはならなかつた。諸他の科學と民族學との關係に、如何に多角的な關係を結ばなくてはならなかつたか？ そこに擧げられた人類學、地理學、法律學、經濟學、歷史學、言語學、心理學、宗教學、藝術學等より藥學、礦物學、植物學、動物學、化學等に至る配列を^(一一)一見して驚かない者があるであらうか？ 然し、この混亂に

落入つた原因は、勿論、自己の科學領域を特殊化個立化して、その發展的關連に自ら盲目であらうとした點にあり、その爲めあらゆる科學に門戸を開放しなくてはならないといふ逆の結果が生じたものではあるけれども、更に重要な原因としては、「未開民族」また「未開狀態」の如何なる現象を取扱ふかに關して、明確な把握の存在しなかつた事實を擧げなくてはならない。^(一二) シュタインタール

またラツツエルは、共に未開民族の生活現象一般を取扱ふものと規定してゐる。^(一三) これらの規定は、民族學が未だ確然たる獨立科學を形成せず、從つてあらゆる任意の分野より、當時の素朴な發展史觀の影響下に試みられた。「史前」への溯源探求を抽象概括したものである。「意識的生活現象」といふシュミットの訂正が、^(一四)純粹歸納科學としての民族學の本質に如何に徹しようとしても、文明民族との關連に於てではなく、從つてそれを靜止の狀態に於て研究しようとするものである限り、所期の目的を達し得ないことは自明である。況んや生活現象の展開は常に意識的に行はれるものではない。シュタインタールは民族學をもつて、非歴史民族の社會生活現象一般の比較研究であると規定してゐるが、^(一五)寧ろわれわれはこの概念規定をこそ補つて、次の如く言ふべきであらう。民族學は、未開民族及び未開時代に方ける文明民族の社會生活現象一般を、その發展の過程と發展起動力の點とに於て比較研究する學である。

(1) M. Schmidt, *The Primitive Races of Mankind*, London, 1924, p. 15.

- (11) M. Schmidt, *ibid*, p. 15.
- (12) わが宇野圓空氏は民族史の譯語を使用して居られる。その理由については何等述べられてゐないが、歴史民族學派とも稱するFoy, Gruebner, W. Schmidt等ケルン學派の主張を參照されたものであらうか。宇野圓空、宗教民族學、頁1。
- (13) L. Morgan, *Ancient Society*, Preface, p. vii.
- (14) エンゲルズ、家族私有財産國家の起源、岩波文庫版、頁七。
- (15) エンゲルズ、前掲書、岩波文庫版、頁10。
- (16) 小山繁三、人種學(總論)、頁四。
- (17) ヘルンハイム、史學研究法、小林秀雄譯、史苑三ノ一、頁九三—九四。
- (18) M. Schmidt, *op. cit*, p. 16.
- (19) L. H. Morgan, *op. cit*, pp. 3—18.
- (20) P. W. Schmidt, 'Die moderne Ethnologie,' *Anthropos*, i (1906), s. 982.
- (21) M. Schmidt, *op. cit*, pp. 20—31.
- (22) H. Steinthal, *Philologie, Geschichte und Psychologie in ihrer gegenseitigen Beziehung*, Berlin, 1863, s. 29 ff.
F. Ratzel, *Völkerkunde*, Leipzig, 1894, Bd. i, s. 3.
- (23) M. Schmidt, *op. cit*, p. 18.
- (24) S. R. Steinmetz, *Ethnologische Studien zur ersten Entwicklung der Sprache*, Bd. I, s. xi.